
最強の召喚士

紅月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の召喚士

【Nコード】

N3151K

【作者名】

紅 月詠

【あらすじ】

事故にあってしまった時^{とき}は気がついたら天国（？）に到着！？
神みたいなものに謝られ。なんとなく異世界に突入！

ブローグ（前書き）

投稿が遅れるかもしれませんがよければ楽しんで読んでください

では、どうぞ！

ブローグ

はじまりは単純だ・・・

俺が17歳になる誕生日に起きた不幸な事故

よくニュースなどで放送される車追突の現場でまさか俺が被害者になる日が来るなど思ってもみなかった

「ちっ、まいったなこれは」

車で引いた人は大変焦っているが引かれた俺はもっと大変な状態だ

「俺は死んだのか？」

地面に足がついてないし

てか、自分の事なのにまるで他人事のようにしか思えない

「死ぬ前に走馬灯のように人生が思い出されるっていうけど実際思いつく時間すらなかったな・・・」

だんだん天に向かって移動してきた

「神など本当にいるのか」

光輝く空に人がぼんやり見えてくる

年寄りのじいさんが雲の上に立っている

「だれだ（じゃ）？」

お互いに質問してしまった

「あ、間違えた！」

老人はかなり大声で叫んだ

「何をだ？？」

初対面でいきなりそんなこと言われてもなんのことやらまったく検討がつかないぞ？

「あつちやゝ。間違つて違う人に事故起こしちゃったのじゃ」

「???つまり俺を殺したのはじいさんか」

速攻俺から目そらしやがったこいつ

「殺したのは車じゃよ！」

「いや、さっきポロツともらしただろ」

マジでふざけんなよ

間違つてやつちまったってどんだけ無責任なんだよ

「だってさ！最近忙しくて徹夜続きだったしさ」

「神様だったら疲れねえだろ。てか、なんで若返つてんの？」

いつの間にか金髪イケメンに変身している老人

「一応第一印象は大切だからさ。神様っぽくしてみたぜ」

ウインクスマイルを飛ばしてくる自称神様

「第一印象って……。それよりも今の状況なんとかしてくれよ！俺未だにふわふわしてんだけど」

現在空中に浮いてる状態の俺

「あー、すまんすまん」

雲の上に乗せてくれたらしい

「まあ、とりあえず神様と話す珍しい経験もできたことだし。生き返らせてくれよ」

だって間違えたんだろ？

「そうしてやりたいのはやまやまなんだが……。もう火葬されるからなあ」

！！

「俺の親行動はやっ！」

「ここは普通より時間の流れがずれてるからな」

「ほつ。天国とは意外と面倒な場所だ」

あれ？つてことは俺は戻れないのか？

「そういうことになるな・・・」

心読むなよ！

「これから俺はどうすればいいんだ！」

「あきらめろ」

満面の笑みで肩掴んできやがった

「原因お前のじゃね？」

汗をたらだら流してる神様

「これ天国で言いふらしたらどうなると思う？」

「やめて！」

「ならなんとかしろ！俺にはまだまだ先の人生があるんだからな」

17歳で死ぬなんて俺の人生設計の中には存在してない

「むゝ。肉体を再生できればよいのだがな・・・」

まあ、地球の科学技術はそこまで進化していないから無理だろう

「やはり地球に送るのは無理だよ」

「たしかに火葬されたのに蘇ってきたらゾンビ以上に怖がられるしな。ん？そういえば地球以外にも人間すんどるところあるのか？」

「星というより異世界だな。そこなら魔法が使えるから秘術で肉体を生成することができるぞ」

魔法かぁ。なかなか面白しろそうだな

「俺もその世界で魔法使えるのか？」

「なんだ？魔法なんて使いたいのか？それならちようどいい地球の人間は無駄に魔力が高いやつが多いからな。たぶんお前もあつさり古代魔法くらいは使えるぞ」

魔獣とか居そうだから。少しくらい準備していきたい

「準備か……。それなら天国のフリマに行つてこいよ。こずかいやるからさ。ちなみにこの紋章見せれば大体まけてくれるはずだぞ」

そう言つて神は俺に向かつて金色の模様が書いてある紋章とよくわからないが金貨みたいなものを20枚寄越した

「どつちでやつてるんだ？」

「えーっとたしか西の方でやっていたはずだ。迷つたら近くの人にも聞いてみる」

無責任だな。こいつ

「ああ、わかった。いってくる」

俺は雲の上に足をつき西に向かって歩き始めた

フリマ会場

様々なものが売り買いされているところになんとかたどり着けた

「へいいらっしやい！旅には欠かせない武器はいかがですか！」

「ほう。武器か」

のちのち必要になりそうだな。魔法が使えても近接戦闘になる可能性があるし

シートに並んでいる剣を試してみる

「エクスカリバーって普通フリマに売ってないだろ！」

どこのRPGだよ！

値段も高いからどうせ無理だ

しばらくフリマを周ってみると本屋みたいなところに付いた

様々な知識の本がぎっしりと本棚につまっている

ふと、店主の横を見るといかにも非売品っぽい本がかなりあった

「なあ、その本見せてくれない？」

「こいつらはちょっと売れねえからな」

やっぱりか。だがそんなことを言われたらますます見たくなる

「これでどうだ？」

俺は紋章と金貨20枚を見せた。すると店主の顔が一変して青ざめた

「すみませんでしたあ！」

全力で頭を下げてるおっさん

それに対して意味がわかんないまま突っ立ってる俺

そんなにあのじいさん権力あったのか？

「そんなことより早くそれ売ってくれない？」

「はっ、はい！」

店主は数冊の本を持ってきて俺に渡すと金貨を持ってすぐに帰ってしまった

「ちっ！神速で逃げやがった」

よくわからん本に全部お金を使っちゃったしとりあえず開いてみるか
ぱらぱら・・・

白紙だな。これ・・・

「はあ？」

表紙には色別で氷の契約書や炎の契約書などが書かれている

次の炎の契約書をめくってみた

ドラゴンやらサラマンダーやたくさんの炎に属する生物や精霊が
描かれている

「もしか図鑑買ったのか俺」

どうしようもねえし神になんて言い訳しようか考えながらとぼとぼ
ととも来た道を進んでいた

天国入り口

やっと戻って来れたか

「結構遠かったぞ」

「おお、おかえり」

俺がこれから行く場所に肉体を生成していたらしい金髪が暇そうに寝転がりながら待っていた

「肉体のほうはどうなったんだ？」

「できたよ。3分でね」

「3分って・・・。早すぎだろ。っていかもしかしてお前って結構権力あるの？」

ちやらちやらな雰囲気出してるからまったく威厳を感じないな

「だって神だもん」

「んじゃ。あいつらはなんなの？」

フリマしてたのは天使か？

「そうだよ」

だから心読むなっつってんだろ！

「ごめんごめん。つつい癖でやっちゃった」

「また読んでるし！」

「ハッ！！」

オーバーリアクションしすぎだろ

「あ、そうだ。この本の使い方って知ってるか？」

図鑑だったらマジで泣こうかな・・・

「むむ！その本は！！」

その本は？

「儂がフリマに出した本だ。ラッキーだなお前」

え！？

「いや、使い方は？」

「ふむ。かな〜り便利なものだぞ。俺の現役時代に使ってたものだ。様々な知識と共に召喚獣が使えるようになる書じゃ」

便利そうな本でよかった〜

「楽しい俺にはピッタリの代物だな」

「楽したいならこのままここにいればいいのに・・・。まあ、さっ

さと体に入れちゃえ」

「体に本なんて入るのか!？」

今さらながら神の世界は非常識そのものだ!

「大丈夫だ。痛くないし、辛くもないから」

そついうとさつそく俺の胸に赤色の本を押し付けてきた

ずぶっ・・・

体に浸透するように吸い込まれていく本

「っ!・・・」

それと同時に大量の知識が頭に流れ込んできた

「なっ!ちよっ!ストップしろ」

ひよいひよいと次々に本を体に入れてきやがる

「頭パンクしそうなんだけど!」

これ絶対人間の限界越えてるって!

「ふうゝ疲れた。「バキッ!」いってえ!」

頭を擦りながらこちらを見てくる神野郎

「お前もう人間じゃないんだからこれくらい平気だつてば」

そういえばここ天国だし俺はもう人間じゃないのか……。ってそんな話じゃねえよな

「十秒以内であやまれでなきゃクロス！」

「10→9→8」「すいません」7→6「なんで止まらないの!？」
はあ……。もういいや」

神で遊ぶのも飽きたな……

「異世界についての知識とかもさっきの本の中に入ってたからそろそろ肉体に移してくれね？」

「その年だと色々不便だと思うけど大丈夫か？」

「適当な学校に転校手続きしてくれないか？一応まだ学生だし」

にやりとした笑みを浮かべている神

「おーけーおーけー。適当にやつとくよ。手続き終わるまでにギルドで金でもかせいでこい」

右手を前に出すとそこには上空から見た町のようなものが見えた空間が出てきた

「んじゃ。行ってくるぜ」

「よい旅を。にやり」

神はこれからこいつの旅を楽しみに見ることにした

「ときどきちょっかいかけてやろっかな」

雲の上をゆったり歩きながら一人呟いた

プロローグ（後書き）

感想と誤字指摘よろしくお願いします

異世界？快適？

人生は山あり谷あり

落ちたり上がったりするもんだとよく言うが今俺はかなりのスピードで落ちている最中だ

「あのバカ神空に転送しやがった」

上空二千メートルという一般人なら「キヤー！」とか言っただけ楽しむものだがあいにくパラシュートもなにも着けてないおれにとっては生死の問題だ

えっと・・・こういう時は空を飛べるやつを呼べばいいんだよね

脳の情報を検索し即座に召喚してみる

パアッ！

空中でも発動できるような簡易魔方陣の光が広がり目の前にはペガサスが飛んでいた

『主。これは助けたほうがいいのか？』

「助けてくんなかったら一生喚んでやんないぞ！」

ペガサスは突然空の上に呼び出されて一瞬戸惑っていたが、うまく

俺を背中に乗せて飛んでくれた

「地面なのに足動かす意味あるのか？」

『それは……。なんとなくです』

初めての乗馬（？）で尻めっさいたいんですけど！

「とりあえず適当に広いところに着地してくれ」

『了解した』

頭に直接響いてくるような声でペガサスが答える

さすがに人間と同じ声帯はもってないからしゃべれはしないらしい

尻の痛みに耐えながら薄い雲に入った

前がいきなり白くなり、抜けた瞬間そこにはかなり大きめの森と草原が広がっていた

「いたたた……。馬乗る人って物好きだなあ。こんなにきついのに乗るなんて」

『ペガサスは馬ではないよ主』

「そもそも足を動かすから痛いんだよ！」

『では主、足を動かさないままとんでいるペガサスを想像できますか？』

.....

「なんか不自然」

『でしょう?』

妙に説得力あるな

「おつとそういえば自己紹介がまだだったな」

『主。召喚したのは我がはじめてか?』

「ん、そうだけど?」

『ならばこれから召喚するであろうものも召喚しておいて一気にすませたほうがいいと思うぞ』

「ナイスアイディアだ。それ採用!」

えーっとこの世界の精霊は召喚するとして他には何を出すかが問題だな

「出てきたとたんに暴れだすやつとかはいないよな?」

恐る恐る聞いてみた

『基本的に本の主には従います。しかしミノタウロスなどの部類は一回暴れだすと止まらない傾向にあるのであまりオススメできません

ん。少しは知性のあるものを召喚したほうがよいでしょう」

やはり気が荒いやつもいるってことが

「戦力としてドラゴンと上級悪魔ぐらいは出しておきたいところなんだけど、どうかな？」

いきなりはさすがに無理か？

『いいですね。こうなったらルシファーくらい出しちゃってくださいよ』

「いやいやルシファーとか俺の方が殺されそうだから」

最上級悪魔さんですからねあれ

『地獄には飽き飽きしてるらしいですから喚ばれたら意外と楽に頼みを聞いてくれますよ？何せあいつは何億年前からいますし、この本以外に召喚の契約はしてないので過去の情報からしても主とは相性が良さそうだと思いますから』

むむむ、自己紹介のためだけに喚んでいいのかと今さらながら思えてきたぞ

「考えてても仕方がないな。とりあえず基本精霊喚ぶぞ」

《蒼天駆け巡る遙か遠く近いもの達よ我に応えよ》

普段とは違う声音で詠唱する。すると目の前にペガサスの時とは違う魔方阵が現れそれぞれ属性ごとに喚ばれた

右から・水属性ウンディーネ・火属性イフリート・風属性シルフィード・雷属性ヴォルト・土属性ノーム・氷属性セルシウスといった感じにすべて呼んでみたけど契約とかのよくわからん

「まったく、人間風情にこうもあつさりすべての精霊王が喚ばれてしまつとはな・・・」

セルシウスが吐き出す

「とはいえ召喚されたものは仕方がないこれは古より決まり掟でありしかたないのじゃ」

今度はノームがセルシウスをなだめた

「とりあえずお前ら俺にお前らのもってる属性魔法すべてを習得状態にしてくれ」

基本魔法くらいは使えないと面倒だしな

「それは古代魔法ハイエンシェントもか？」

「できればそこまでやってくれ。いちいち学校で習うのも面倒だからさ」

「了解した」

ヴォルトの了承と共に精霊王がそれぞれ詠唱を行っていく

ペガサス同様に心の部分は一部繋がりがあつたため脳に直接知識を送

ってもらって作戦だ

「っと今のうちにドラゴン喚んどくか」

パアッ！

前回のペガサスと同じく片手を前に付きだし今度は空中で六芒星を描く

半径20メートルほどの巨大な紅色の魔方陣となった

「グガアア！！」

雄叫びと共に黒色の鱗を纏い血色の瞳をもった巨大な黒龍があらわれる

そのときちょうど精霊王達からの魔法を受け取り終わった

「おい！しゃべれないのわかったから心でしゃべれバ力龍」

雄叫びがやみ静寂が周りを包んでゆく。精霊王達は黒龍を見ると自分の仕事をさっさと済ませてそそくさ還っていった

『今回の主は貴様か若造』

「やっぱり言葉わかるんじゃない。だったら話ははやい俺のために戦闘になったときに助けてほしい」

『わかった。それにしても主の魔力ならそうそう手こずる敵などいないものだな』

樂したいから！なんて言えないよ

「ちなみにこのあと喚ぶやついるから自己紹介はそのあとでな」

パアッ！

さすがに一回ずつの召喚は面倒だから一気にだしてしまおう

今、召喚したのはルシファー・シャドウ・セイレーンといったやつらだ

シャドウとセイレーンはいいとしてルシファーがめっちゃイケメンなんですけど！

切れ長の目に肩まで伸ばした綺麗な黒髪は女性の目を奪いさつてしまっただろう

そして、なんかおまけみたいに銀髪の16歳ぐらいの少年がついてきてる

「誰だお前？」

銀髪にとりあえず質問してみる

「俺か？俺は口キつて言うんだ。聞いたことあるだろ？」

これまた伝説級の人がきちゃったよ

「すまねえな。どうしてもついて行きたいって利かなくてさ」

とルシファーが説明する

連れてくるのはいいんだが魔方阵に2体同時に召喚なんてしていいのか？

ちなみに本の知識によると召喚師の生命がもたないとかなんとからしいが・・・

「この世界の人間じゃないからできるんかね」

伝説級の悪魔とか喚んでもまったく疲れてないからな

「それで俺を喚びだした理由はなんだ？」

ルシファーが尋ねてきた

「うーん。とりあえず自己紹介が目的だ。俺の名前は^{「こがらしやあや」}冨時哉だ。新しい本の主でもある。よろしくな」

「よろしく(です)」

うむ、皆いい返事だ

「さっそくだが魔法について教えてもらいたい」

伝説級のやつらならそれだけ多くの魔法を知っているだろう

「おう。わかった今送るぜ」

「俺も送る〜」

ルシファーに続きロキも呪文の詠唱を開始した

「よし。セイレーン、薬の精製とかせてくれ。シャドウは俺の荷物やらないやらを空間に保管する役割を頼むよ」

セイレーンとシャドウはこくりと頷く。二匹はさっそく作業にとりかかってるようだ

『ひとまず、これで安全に旅ができそうですね』

ペガサスの言ったとうりに行ったが予想以上に事がうまく運んだ

「ありがとよ。ペガ」

『ペガなどと呼ばなくていいですよ。私には零^{れい}という真名がありますから」

零か。ずいぶん日本風だな

『主〜!』

声にびっくりして横をみるとドラゴンが泣きそうな目でこっちを見ていた

「どうした？」

『やることがないんだよう！！』

.....

ひとまず帰れ。満面の笑みで言っただけさ

『扱いひどい！？』

実際お前いたら魔物とか近寄ってこないから便利だけども。逆に討伐とかのときに大変になるからちよつと邪魔になるんだよな

『もういいよ……。どうせ俺はもう喚ばれないんだろ……。』

ドラゴンはふてくされながら還っていった

ルシファーとロキは詠唱を終えて今はおしゃべりをしている

「シャドウそっちも終わったか？」

こくりと首のようなものを縦に振る

「それじゃ、これからお前は俺の影に紛れ俺の命令にしたがい保管や護衛を担当してくれ。セイレーンは還ってくれ」

セイレーンは光に包まれ還り。シャドウは俺の影とどうかしていた

「ルシファー、ロキお前らはこれからやりたいことはあるか？」

一応聞いてみるか

「「街破壊したい」」

「却下！」

聞いた俺がバカだったよ

「零。お前は人間の姿になれるのか？こいつらみたいに」

ルシファアはもとは巨大で凶悪な悪魔だし、ロキは時を司る大きな
白銀の狼だ

『どんな姿がお好みですか？』

「自由に変えられるのか！？」

こいつは朗報だぜ！

『髪の毛だけですが』

ガーン！！

だと思ったよ・・・

「ロングで」

『わかりました』

パアッ！

召喚時に出るような光とともに現れた美少女はロングの銀髪に整っ

た顔立ちをしている

「かわいいな」

正直な感想が口から漏れてしまった

「えっ、え？そうですか？」

と顔を赤らめる零

俺なんて顔よくないから前の世界ではどの女子も距離をおいてたかな

「あの神め、どうせなら俺をイケメンにしてくればよかったのに」

「時哉様は十分カッコいいと思うのですが・・・」

基本的に前の学校にファンクラブというものあったらしいが定員が多すぎたためなくなったことを時哉は知らない

「ありがとよ。ところでここ草原と森ばかりなんだけどさ。どっちいけば人がいるんだ？」

上空からチラッと見たのだがだいぶ遠くに街があった

「私に乗っていけばすぐですがどうしますか？」

いや、さすがにペガサスに乗って街行くのは無理な気がしますよ

「風魔法の練習ついでに飛んで行こうか」

知識はもらっていつでも使えるのだが実際使うのは初めてだな
なんだかどきどきするぜ

「レビテーション」

ふわりと二人のからだが宙に浮く

「西に進んで行ってください。先に街があつたはずですよ」

そのまま俺達はまだ不安定ではあるが街に向かった

（途中でロキとルシファアのことを還し忘れたので遠距離から還喚
しておいたのは零は知らない）

時哉はあいつらが遊びで森を破壊してなかったかが心配になってい
たがまだ創造魔法は使えないのであきらめた

異世界？快適？（後書き）

いかがでしたが？

感想と誤字指摘よろしくお願いします

はじめてのクエスト（前書き）

大変遅くなりました

はじめてのクエスト

やっと街に着いた

日本の街とは違いビルなどはまったく見当たらない。たとえば言うなら昔のフランスのような建物が多い

「到着したものの何をしたらいいのやら」

時代的に進んでないことはわかったけどさもしかしてここ王政かな？

「主。何はともあれお金は必要になりますよ？」

そういえば無一文だった俺達

「神がギルドで働けとか言ってたけどさ。実際どこにあるんだろう」

とりあえず街の大通りらしきところを歩いていく

そして・・・

「あつたし・・・」

文字は読めないが認識魔法で意味は理解できる。ギルドってそのまんまのでかい看板が店の前に置いてある

時哉と零はギルドに入っていった。中は広めの集会所くらいのスペースがあり全体的に居酒屋のような雰囲気が出ていた。ただひとつ違うのはカウンターにはメニューの他に依頼のカードなどが置いてあるということだ

「すみません。依頼を受けたいんだけど」

受付にいた女性に話かける

「あ、はい。ギルドライセンスはお持ちでしゅむか」

噛んだ……。顔が赤くなっている女性

「持ってません。ギルドに来るのははじめてなので」

「そうなんですか？実は私も受付は初めてだったんですよ。普段はハンターの方をしてるんですよ？」

ほう。よく見たら結構小柄なのにハンターをしてるのか

「ライセンスって年齢制限とかないのかな？」

「ありませんよ？簡単なものなら一般人でもできますから。あ、そういうば自己紹介がまだでしたね。私はティア・フェルトと言います。困ったことがあったらなんでも聞いてくださいね」

ティアは満面の笑みで挨拶した

「ああ、俺の名前は時哉だ。それでこっちの女性が「零」です。よろしくお願いします」つというわけだ」

「こちらこそ。それでは、この板に手を乗せてください」

つというと、人の手がちょうど乗るくらいの板が前に置かれた

「えっと、これはなんだ？」

「知らないんですか？ステータスを測る魔法具ですよ。」

そんな便利なものがあるのか、しかし俺がそれ使ったら大変なことになりそうだな

「ステータスって具体的にどういふのが出るんだ？」

「えーと、腕力と防御力と魔力の量がわかりますよ」

腕力と防御力はいいとしても魔力を測られるのはまずいな

（なあ、魔力測ったら問題になるよな？）

声を出さず零に聞いてみる

（そうですね。周りのもの達を見ても主の魔力の100万分の1くらいしかありませんからもしかしたら異端視されるかもしれませんね）

いきなりハードなこというなあ

「あのさ、魔力だけ測らないことできる？」

「測りたくないならそうしますけど後々他の方のp tを組む時とか便利ですよ？」

「あんま組まないと思っからさ」

ティアはまだ納得してない表情だ

「それじゃ腕力と防御力を測りますね」

右手を板に置く

すると目の前に立体の画面が出てきて腕力と防御力のパラメーターが表されている

「腕力クラスC、防御力クラスD一般人の平均値的な数値ですね」

一般人宣言に安心する時哉

「では、こちらをどうぞ」

カードを手渡された

これがギルドライセンスか

「あと、私のデータも入れておいたのでもしよかったら今度一緒にクエストでも・・・」

少し赤くなるティア

これはもしや・・・

また囁んだのかな？聞こえなかったけど

「ああ、それじゃ暇な時に誘うよ」

「さっ、誘うだなんて!!」

ん？何か変なこと言ったか

（主はモテますね）

（モテてねえだろ。あからさまに挙動不審だしさ）

（これから苦労しそうですね）

まったくわかっていない時哉をあきれ顔で見る零

「さっそくクエストやるか！」

こついうの憧れだったんだよね

『Fクラスクエスト：ドラゴン討伐任務』

よし！これにしよう

実際ドラゴン持つてるしおもしろそうだしな

無人のカード読み取り魔具からカードが出てくる

依頼成功後のランクはAになるらしい

Fって最下ランクじゃなかったのかもしれない

そんなことを思いながら俺は街の外へとむかった

『危険！我竜の棲みか』

『逃げるべし！』

『入るな！』

洞窟の前かなりの数の看板が建っている

「こんな洞窟にドラゴンなんているのか？」

「中から強い魔力を感じます。ここで間違いありません」

魔力感知に慣れていない時哉には感じないが洞窟には一級魔道並みの魔力が満ちていた

やがて、進んで行くと広い空間に出た

ドンドンッ！

地面を揺らすような地響きと共に巨大なドラゴンが現れる

「おっと、忘れてたぜ」

パアッ！

前方に巨大な魔方阵を作る

黒龍を召喚する

『久しぶりだな若造。我に何か用か？』

久しぶりか？

「ああ、彼処にいるドラゴン倒してくれないか？」

『倒すのか？仲間にするのではなく？』

仲間って言ってもあんなデカイの連れて行けるわけないだろ

『なんなら言って来るか？』

「あいつも変身できるのか？」

『我がちよちよいと教えてやればよい』

お前もできたのかよ！

パアッという光に包まれてダンディなオッサンが現れた

「伝説の生き物はみな変身できると・・・メモメモ」

「いや、お前が出してる俺らが特に異常なだけだから」

おお、声までダンディ！

「てか、さっさと行ってこいダンディ男！」

「はいはい、わかったよ」

黒龍はとぼとぼとドラゴンに近づく

「俺のことわかるよな？」

グルルウ・・・

どうやら肯定したみたいだ

「今からてめえに変身のための魔法を教える。ありがたく思え。ちなみに拒否はできない。ついでに若造のお守りを頼む」

お守りってなんだよ

グルルウ！

さすがにいきなりのことだ驚いているようだが、黒龍が言ったように拒否はできない

「よし、お前の脳に魔法の使い方は送っておいた。変身してみろ」

コクリとドラゴンが頷くと体が光はじめやがてやむとそこには13歳くらいの幼女もとい少女が立っていた

メスカよ！全力で突っ込んでいた（心の中で）

「言葉わかるか？」

とりあえず話しかけてみる時哉

「はい。おにいちゃん！」

！！！！！！？

「おい黒龍いらん知識も入れたらう」

親指たてて満面の笑顔でいる黒龍

「うれしかったらう若造」

「てめえの趣味を俺にあてつけるなあ！」

そりゃちょっとは可愛い！って思ったけどさ黒龍気付いてないし気のせいかもしれないけど零の視線がかなり痛いんです

「おほん！急いでここを出るぞ」

時哉達は出口に向かい歩きはじめる

「そつえば、依頼内容討伐なんだけど仲間にしちゃってもいいのかな？」

ギルドにどう説明するかだな

「私お兄ちゃんの邪魔かなあ？」

涙ぐんだ目で上目遣いは反則ですよ我竜ちゃんこれでさっきの竜なんて信じられないぜ

「くくくつ、なんだかんだ言っで楽しんでんじゃねえか」

「黒龍は黙りなさいそしてさっさと還れ」

「意外とはつきり言うやつだな。まあ、今回は楽しめたからいいや。まったな」

と言に残して黒龍は還っていった

はあ、これから街まで飛ぶのか・・・めんどくさい

「転移魔法とか早めに覚えておいたほうが良さそうだな」

「転移を使うなら各所に魔方陣を設置して魔方陣同士をリンクさせればできますよ?」

設置する場所は人目につかないところにしたほうがいいかも

「ところで我竜の真名を覚えてくれないか?」

名前呼べないといろいろと不便だからな

「ティア・フェアベールです。ティアと呼んでね。お兄ちゃん」

黒龍がいなくなったのに妹モードを解除しないってことはこのまま俺はお兄ちゃんと呼ばれ続けなければならんのか!

複雑な気持ちだ・・・

なんだかんだ言いながら洞窟探検はあっさり終わり洞窟の入り口までついた

「よし、念のため洞窟を荒らすやからがないように封鎖しよう」
時哉は洞窟の前に薄い風の膜のような結界を張った

「ありがとう。お兄ちゃん」

うれしかったのかティアは俺に抱きついてきた
だから零の視線が魔眼なみになってるって！

「あゝ、街に行こうか・・・」

金がなくては食事もままならないのでギルドに向かうことにした

ギルド

ギルドに到着！

つといきなりギルド内が騒がしいぞ

おっと、あの子がいるぞ

ライセンスによると名前はエリーらしい

状況を聞いてみるか

「よう。エリー」

「ひゃ！あ、時哉さん」

肩に触れた瞬間飛び上がったその子。そんなにおどろかんでもいい気がするが

「なんでこんなにギルドが騒がしいんだ？なんかあったの？」

「あの、手違いだったんです。ドジですみません！！」

いや、いきなりあやまられてもなんのことやらなんだが

「落ち着けて一体何があったんだよ」

仕事でミスしたのか

「えっと、Fランク任務にAランク任務が混ざってて……。どうやら初心者さんが受けちゃったみたいなんですよ！」

もうすでにエリーは涙目だ

「てか、もしかしてこれのことか？」

俺はエリーに任務を受けているギルドライセンスを見せる

「そ、それです。時哉さん。まだ出発してなかったんですね！よかった」

むしろ終わってるんだけど・・・

「いや、終わってる」

その言葉に今までざわざわしていたギルド内の会話が静寂に包まれ時哉にみな視線が集まる

少ししてまた会話がはじまる。大方こんなガキにできるわけないだろうと判断しんだな

「まあいいや俺は目立ちたくてギルド来たんじゃないし」

さっさと報酬もらって飯食いたいぜ

「えっと、何か証拠は何かありますか？」

証拠かあゝ

「特にないな。あの依頼の達成には書いてなかったからさ」

「ちょっと連絡を取ってみます。少し待っていてください」

遠距離連絡の手段があるみたいだ

「魔法の練習がまだまだ必要な」

時哉は1人呟いた

しばらくしてエリーがパタパタと走ってきた

「連絡取れました。我竜はいなくなっていたそうです。それでは報酬を渡しますね」

再びエリーは奥に消えて行った

（今さらだけど報酬ってなんだっけ？）

零に心に話かける

（たしかランクのアップと金貨100枚だったと思います）

金貨100枚がどれくらいの価値かはわからんが飯くらいは食べれるだろう

「おまたせしました。ギルドライセンスをかしてください」

俺はエリーにライセンスを渡した。エリーは機械にライセンスを通して内容を再確認しているようだ

「はい。作業は終了です。これは報酬の一部の金貨10枚です。残りの金貨はライセンスに入れておいたので近くの銀行などにいけば引き出すことができますから」

そう言つと金貨とライセンスを渡してきた

「ありがとう。また来るよ」

時哉は笑顔でエリーにお礼を言いギルドを後にした

第三話今後の目標とギルマスとときどき偽者

ああ、思わず当たり前のことを聞いてしまったあ！

（俺こんな店来るのはじめてだ）

（主は外食したことがなかったのか？）

零が猛烈な勘違いをしている

「えっと、お席はあちらにどうぞ」

何か気まずくなっていた

席についてメニューを見る

『ハンバーグ定食（楓）』

ハンバーグ定食はわかるが楓ってなんだ？

壁を見てみると何やらメイドのメンバー表みたいなのを発見

楓って人の名前だったのかよ！恐るべしメイド喫茶

おっと、早く頼もうっと

それから俺達は食事を早く済ませて店を出た。

終始、零とティアの視線が鋭かったのはたぶん気のせいだろう

森

おーい神様〜！

むむ、なんだ人間

なんだじゃねえよ。学校の件とこの世界についての情報くれよ

まったく神使いの荒い人間じゃなあ

神はしぶしぶ情報について送ってきた

まず今現在俺のいるところはシビエルと言う街らしいまあ、この名前は街の看板に書いてあったからわかるが問題はこの次だ

この街を治めている国セレバと言う名前がこの大陸の中ではかなり大きな国だ

やはり思ったとおり王政で比較的平和な国だ

しかし、隣の国に位置するベサイア帝国はかなり好戦的な国で今のところはベサイアが他国と戦っているため停戦協定を結んでいる

つとほかにも色々世界の地図などもまとめて情報が入ってきた

「一応ここに召喚されたんだからここが俺の祖国ってことになるのか」

質問とかされたときすんなり答えられないと怪しまれるからな。こ
うゆう情報はしっかりおさえておかないと

「じゃあ、私もシビエル生まれなんだね。お兄ちゃん」

何故か知らんがさつきから無性に腕に絡んでくるティア

零は痛い眼差しだけを送ってくるばかりで助けてはくれなさそうだ

なにはともあれこれからどこに行くかが問題だよな

「首都に行ってみるか」

装備とか整えたいし

「乗りますか？主」

零が聞いてきた

「いや、目撃されると面倒だ。移動は普通の馬車でいくさ」

「私に乗れば早いのに・・・」

まあ、ステルス使って消すことも出来るんだが、めんどくさいじゃん
首都まで魔法使いっぱなしってことは最低でも一時間はかかるだろ

うし

ってことで馬車借りに行こう

街

再び街に戻った俺達は馬車を借りるため銀行でお金を降ろすギルドの近くを横切った

いろいろ教えてもらったからお別れの挨拶ぐらいしていこうかなつと時哉が思っているとエリーが走ってきた

「おお、いいところに来た。実はな「時哉さん！急いで来て下さい！」へっ？」

そのままエリーに手を引かれギルドに連行される時哉

「ちょっと！どうしたの？」

いきなり連れてかれたからびっくりしたぞ

つと、俺の質問に答えるひまなくギルドに入った

カウンターでは係の人に絡んでる男達がいた

「あのですね。あそこにいる男達が自分達が我竜を倒したと言ってるんですよ」

つまり偽者登場ってことか？

はたから見るといかにも冒険者って感じの装備で何故か知らないがリーダーっぽいやつが背負っているものが気になる

とりあえず、騒ぎを収めよう

「はいはいそのチンピラさん方、俺が我竜倒した本人だから文句があるなら俺に言いなよ。相手になるぜ」

俺はにやりと笑ってみせる

チンピラ達は本物登場に少しビビっていたが相手が少年だと気づいたらしく強気で近づいてきた

「おいおい兄ちゃんいきなり俺ら三人に喧嘩売るのがかい？」

エリーがすかさず間に入ろうとするが零が止める

「喧嘩なんて売るつもりないよ？ただ事実を言いにきただけだから。俺が我竜を倒した」

「ほう。ならばどちらが強いかで倒した方を決めようじゃないか」

リーダーらしき男が背中に背負っていたものを構えた

・・・ネギ？

「武器？」

「武器に決まってるだろ！」

いや、普通にネギは武器じゃないと思うしかたないだろ？

「ボスの剣には催涙効果もあるすぐれものなんだぜ」

子分が解説した

「個人的にはすごくその剣使ってみたんだけどくれない？」

「へっ！欲しかったら奪ってみな！」

リーダーの一声により同時に時哉に遅いかかる

時哉は指をパチンとならし時間を少しの間止める

「ロキから受けとった知識だけどちよつと反則だよな」

今使ってみたのは一定空間の時間を止めるものだ

現在はギルド内のものをすべて停止状態にしている

「よつこらしょー！」

椅子を走ってる最中の三人の足元に設置し時を戻す

ズザーー！

「……………」

一触即発な空気の中で思いつきりこけてしまった三人

「まだやるか？」

「いや……もういいです……」

周りでは笑いを堪えているものが多く見られる

三人は揃って裏口から外にかけて行った

恥ずかしかったんだろうなあいつら……南無

「一体何が起きたのかわからなかったですけどあの三人どうして転んだんですか？」

ティアが興味津々で聞いてきた

「椅子にこけた。それだけだよ」

能力とか一切話すつもりないから誤魔化せるように撃退してよかったよ

なんだか疑いの眼差しを向けるティア

ぐしゃぐしゃ

頭を撫でてやる

「はうあ！」

おお、いい反応だな

「いずれにしろ一件落着だ」

「むう、お兄ちゃん私も撫でてよう」

ティアがエリーを睨めつける

ブラコンってやつか？

「いやいや、ギルドが傷つかなくてよかったよ」

どこから声が？っと思いい下に目をやるとそこには十三歳くらいの少年が立っていた

「ギルドマスター・・・」

ざわつく周りからばそりと聞こえた

「ギルドマスター！！」

エリーが頭を下げている

そんなに偉い人なのか？

「頭を上げるエリー。それとこのハンター恩にきるぞ」

「お・・・おっ」

見た目とは違う大人な口調に少し困惑してしまった時哉

「あの三バカ共に我竜を倒す実力がないこと過去のクエストからわかっていたをだが・・・。対応に遅れてしまってますまん」

「いえ、実質被害がなかったので大丈夫ですよ」

「そうだ、その時哉とかいうやつ」

「俺に何か？」

この件以外に会ったことない気がするんだけどなあ

「実はな、このギルドにきていたフランククエストの解決者が無名ということだめんどくさい人が興味を持ちましたらしいんだ」

「はぁ・・・。めんどくさい人とは誰ですか？」

・・・

「シビエル王の王位継承権第2位の姫様だ」

普通に考えて姫様がクエストの状況知ってるとは思えないんだが・

・

「一先ず俺が取りなすから早急に城に行ってくれ。あつ、俺の情報
はギルドライセンスに載ってるから詳しくはそれを見ておけよ」

そう言い残すとスタスタとギルドマスターは奥に消えていった

あいつの名前ぐらいは確認しとくか

えーっと、クレイ・シルバー年齢17才か・・・若っ！

「はあ、いきなり色々ありすぎて疲れた今日は宿をとって休むか・

」

こうして騒がしい1日は静かな宿屋に着くと同時に終わった

第四話姫様はおてんば？（前書き）

遅かったですね・・・

ごめんなさいTTTT

第四話姫様はおてんば？

巨大な城の一室そこは白を基調とした美しい部屋だ

ただひとつ壁に掛けられている剣などが目立つくらいでそれ意外はかなり豪華な家具となっている

「やっと着いたようじゃな」

窓から外を眺めながら呟く女性

「姫様。以前に言っていたもの達が来たようです。謁見の間においてください」

「わかっておるマーサ。少しくらい待ってくれ」

侍女に催促され急いで部屋をでる姫

今度の客人は妾を楽しませてくれるかのう

あらたな玩具にありつけた子供のように胸踊らせ謁見の間へと向かうのだった

謁見の間

予想より若すぎる青年だ

妾をばかにしているのかクレイはこんなガキが竜種を倒せるわけあるまい

「妾の名はレティシア・クラウンベル・セレバ。このセレバ国の第三王女じゃ。顔を上げそちの名を述べよ」

妾を騙すとは後でクレイにはお仕置きが必要なようじゃな

レティシアの命令により顔を上げる時哉

ふう・・・面倒そうな姫だなあ

「私の名は時哉でございます」

なんか慣れてないから変な敬語になっちまったぜ

あれ？姫がなんか固まってるぞ？俺なんか無礼なことでもしちまったか？

実際時哉行動は片膝を着いた状態から頭を上げて自分の名前を述べただけだ

な・・・な・・・なんと整った顔着きじゃ・・・

顔上げると言ったのは自分だがここまで呆氣にとられるとは計算違いだった

い・・いかん！妾は姫なのだこんな会ったばかりの男の顔に見れるとは未熟ものじゃ！！

心の中で葛藤している姫だが周りのもの達は少し困惑している

「して、姫様。私にはどんなご用で？」

時哉の質問で我に返ったレティシア

「そなたの噂は聞いておるどうやら竜種を倒したそうではないか。それは本当か？」

「本当です。しかし、たまたま運がよかつただけですよ」

「ど、どんな戦いじゃったのだ！」

身を乗り出して聞いてくる姫

「えーっと、地震ですよ。戦闘中に地震があつて我竜は土砂と共に埋められてしまったのです」

「なにっ！それでは竜に向かって魔法や剣撃は与えていないのか！？」

「一応あえましたがわたしみたいな平凡なものの攻撃ではダメージはあまりなかったでしょう」

（実際補助魔法で強化しなければ通常の人間とそう変わらないし）

がっかりそうに頭を落とす姫

「なんじゃ、せっかく噂のドラゴンキラーに会ったのにこんなものか」

（噂になってんのかよ！おい！）

「あまりお役に立てなかったようでもうしわけございません」

時哉達は頭を下げると出口に向かって歩きだした

城内

まったく顔はよかったがなんともつまらない男じゃった！

しかし、あやつには何か深いものを感じたぞ・・・

そういえば武器を持ってなかったがどうやって戦ったのじゃ

・・・謎が多い男じゃな

さっきの話もよくよく考えてみるとかなり不自然なことに今さら気付いたレティシアであった

城下町

「疲れたあ！」

城の重苦しい雰囲気からうって変わった城下町に時哉達は来ていた
さすが首都だけあってかなりの出店が並んでいる

「お兄ちゃん。あれ！あれなに？」

ティアが指差す方向をみると何やら大きなテントがある

「サーカスのテントだなあれは」

「サーカスとは何ですか主？」

うーん説明しにくいな

「まあ、行った見たほうが早いよ」

そう言っ受付にお金を払いテントの中に入る

中は広くかなりの人でうめつくされている

「うわぁ！」

こんなに多くの人を見たことがない二人はかなり驚いている

「何故象がボールの上に！危ないですよ！」

零が必死に言ってくるが芸なのだから止めても向こうが困るだろう

結局サーカス団はすべての技を成功させ大満足で終了した

「お兄ちゃんもできるの？」

「いや、さすがにそれは無理だ」

無知ぶりすぎるよティア

そんなこんなで長旅で疲れた俺は崩れるように宿屋のベッドで寝た

朝

「早く起きるか！このたわけもの」

騒音（声）で起こされた時哉は自分の目を疑った

「・・・なんだ夢か！ふああ・・・二度寝開始」

ガバツ！

毛布を剥がれた

「夢ではないぞ！早く出かけるしたくをせい！」

とりあえず拳手

「あのー、姫様ってここにいるても大丈夫なんですか？」

そうなんでここに姫様がいるんだよ

「バレなければ問題はないのじゃ」

えっ へんと胸をはる姫様

「それって大いに問題ありますよ！」

「まあ、細かいことはいいのじゃ。それよりも今日はお主の実力を確かめたくてわざわざここに来たのじゃぞ」

「はぁ……。それで具体的になにしろって言ってますか？」

ベツトから飛び起き姫様を部屋な外に押しだし着替えをはじめる

よくみれば姫様の装備は完全に狩りに行くためのものだ

「あつ、そうだ。装備品とか揃えたいんで武器の店によってもいいですか？」

ドアの外にいる姫に確認を取る

「ん……。そちらの装備はないのか？」

「ないっていうか。前の戦闘中に壊れたんです」

「ふむ。その歳でかなりの戦闘を積んでいるのか」

なんか使いこんで壊れたと解釈されたらしい

「そつえば零とティアはいるのか？」

二人は別の部屋に寝ることになっている

理由はもし俺の部屋に来た場合色々と問題が起こりそうだからだ

俺は着替えを終えドアを開ける

「おはようございます主」

「おはよう！お兄ちゃん」

三人がドアの前で待機していた

「それじゃ、装備品を揃えに行くか」

宿屋を出て武器屋に向かい歩いてゆく4人

ここの宿屋の代金を払っても金貨はまだ90枚もある

「装備品ってどれぐらいするのかな」

「武器以外の防具なら三人で金貨30枚といったところじゃ」

実質俺しか装備品買わないから金貨15枚くらいですみそうだな

（前、脳内検索をしたとき鋼の書つてのもあったからもしかしたら

錬金術的なこともできるかも)

(魔力加工というやつですね。属性ごとに様々な付加効果をつけることが可能ですよ)

零と歩きながら心で話していると目的地に着いた

「ここが首都の武器屋じゃ。なかなかすごいじゃろう?」

「ああ、すごい品物の量だ」

スーパ―並みの武器と防具の品揃えだ

そこらへんにあるブロードソードは十本で銀貨五枚とか書いてある

金属自体に干渉すればオリハルコン作れそうだな

さてと、防具はどうしようか

「時哉! ちょっとこれを来てみる」

姫が持ってきたのは日本風の武士の服装

「うむ。なかなかじゃな」

「次は私のを着てください主」

今度は中国風の服装だ

「かなりいい感じですよ」

趣味バラバラじゃねえか！

「お兄ちゃん！これ着てみて」

一番危険な香りを漂わせるティアの持ってきた服は意外とまともな・
・

白いスーツって結婚式じゃあるまいし・・・

チラッ

横のティアを見てみるといつの間にかウェディングドレスに！？

「どんな武器屋じゃほけい！」

いても立つても居られなくなり思わずシャドウからハリセンを取りだしティアに突っ込んでしまった

だってこれが普通の反応でしょ？違うの？

「とりあえず式を挙げましょうお兄様」

「とりあえずってなんだよ！？ていうか、また呼び方変わってるし。俺はこれにするからほっといてくれー！」

あらかじめセッティングしていた服を持って急いで更衣室に飛び込んだ

後ろでキラリとティアの目が光っていたような感じがしたのはたぶん気のせいだ

バツ！

ベーシックな黒の服に漆黑マントを被った格好の時哉

「なかなかいいの」

「まあ、お前らのお遊びに比べればな」

「むむ、失礼な遊んでなどいなかったのじゃ」

「それじゃ逆にお前のセンスを疑うぜ・・・」

ため息を一つつき今度は武器を選びに言った

あらかじめ鋼の書に書かれているものを見て必要最低限のものを買っていく

姫にはばれないように買ったらずシャドウに荷物を任せる

これを繰り返し実験よの予備の分の鉄や銅などの金属材料も購入した

これにより残金は金貨40枚となった

「時哉、おぬしその適当に取った剣でよかったのか？」

俺が持つてるのはただのブロードソードだ

「切ればなんでもいいよ」

実際自分で手にかけるのは少し抵抗がある

「そうかならば！そろそろ旅に出発じゃの！」

「っと、その前に依頼受けてからね」

俺は姫をなだめるとそのままみなで首都のギルドに向かった

第四話姫様はおてんば？（後書き）

文章がところどころわかりにくくなってると思います。
できたら指摘や感想など待っています。

第五話土蜘蛛退治（前書き）

あー・・・なまけすぎたorz

第五話土蜘蛛退治

現在首都ギルドの前に三人できております

姫様はどこかつて？

姫様はロキの魔法で彼女をシャドウに収納中ってわけだ

扱いがひどい気がするがそれには理由がある

第一にギルドに姫がいることが周りにバレたとき俺がとってもめんどくさいことになる

第二に近衛兵をつれていない状況でガラの悪そうな冒険者のいるギルドに行くのは危ないからである

ってことで姫様はシャドウの中に収納というわけだ

「やっと着いたな・・・」

首都は想像していたより大きくかなり疲れた

さすがにギルドもでかい。前に入ったものの二倍くらいのでかさだ

俺達は受付に行き、適当に姫様の喜びそうな依頼を探してみる

「高レベルなものがほとんどですね・・・」

「低いのないよ?」

腕利きが集まる首都ならではのギルドの依頼の内容は高ランクのものばかりだ

まあ、高ランクと行ってもBやAの依頼ださすがにSは一つしか出ていない

「麒麟討伐クエスト」いかにも片手剣が必要になりそうな張り紙が貼ってある

さすがに姫様連れていくわけにも行かないよなあ・・・

本物の麒麟の毛皮に魅力を感じたがまた次の機会にしよう

Cランク任務土蜘蛛討伐

「まあ、Cならなんとかなるよな」

「蜘蛛ならもしもの時は飛べば逃げられますから大丈夫です主」

零もこう言ってるし問題ないな

俺は受付でこの任務を受注してきた

ついでに町外れに転送ようの魔方陣も設置した

それから俺はシャドウから姫様を呼び出し時間を再び動かす

ここからが長かった・・・

依頼については喜んでいたもののギルドにつれていかなかったことを言ったら狂ったように文句のマシンガンを浴びせてきやがった

「はいはい姫様。これ以上言うとコンクリで固めて湖に投げ捨てますよ」

普通なら静かになるところだが

「コンクリとはなんじゃ？」

そうだったこっちで存在しないものだったのか

「とりあえず！静かにしろよ」

威圧感たっぷり満面の笑みで姫をにらめつける

「はい・・・。ぐす・・・」

眼光だけで泣かせてしまった？

まあ、気にしたら負けだ

そのあと俺達は土蜘蛛の生息地のハンジャの森に向かった

移動は徒歩だがそう遠くにある森ではないので今日のうちに帰ってこれるだろう

その間に俺はさっき買ったブロードソードを錬金術の実験に使うことにした

まず、一本目は目に見えない剣に決めた

金属の密度を高めその薄さをナノレベルにまで錬成していく。さらにこの剣には自身の魔力の入れ具合により自由に長さを変えられるようにしておく

二本目はただ強度を求めたオリハルコンの剣だ

この金属は一般人では壊すことはおろか溶かすこともできない扱いづらい代物だ、しかしだからこそ軽さと強度の両方を兼ね備えている

三本目は天界で見たエクスカリバーをイメージして作った剣だ

属性はもちろん光で光輝くすばらしい刀身の剣に仕上げた。実際にこれが一番性能が低いかもしれない

「まあ、こんなもんだろ」

五本中三本はかなり強力なものとなった

「森に入ったらいつ襲われるかわかりません。今のうちに強化呪文

をかけてください」

零の忠告で俺はあらかたすべての強化呪文を自分にかけて

もちろん全力ではなく自分の魔力の調整にちょうどいい機会だったからためしに使ってみたものも多い

とは言いつつ人間の限界は普通に越えてると思うけどな

森の中を歩いて目的地に向かう俺達

感知の魔法を使って周りを調べているが魔物はもちろん普通の昆虫すら少ない

つと、その時俺の足元が崩れた

「ちよつ。ぎゃー」

穴はジェットコースターのようになっており臨場感たつぷり・・・
じゃなくて本当に死ぬかと思ったぞ

どさっ！

どうやら底に着いたみたいだ

「光よ」

周りが一気に明るくなる

洞窟壁や天井には蜘蛛の糸が張り巡らされておりいかにも蜘蛛の巣の中って感じた

「うわゝ。完全に土蜘蛛の巣じゃん」

1人でこの光景に啞然としているといきなり後ろから突き飛ばされた

「うぎゃ！」「にゃ！」

先ほど俺が落ちてきた穴から勢いよく飛び出てきた姫が俺の背中にクリーンヒット

「補助魔法かけてなかったら背骨に瀕死のダメージ受けてるところだぞ！このバカ姫！」

顔を押さえている姫

「ぬゝ、こっちの方が痛いじゃ！それに妾はバカではないわ！この平民！」

「2人ともまずは土蜘蛛を退治してから口喧嘩してくださいね。ほら前をみて」

ちらつと洞窟の先をみると一匹の蜘蛛がいた・・・

「なんかでかくないか？」

三人分くらいのでかさなんですけど！

「蜘蛛はこんなに大きくなるものなのかな?」

「いや、普通ならから!」

「主。土蜘蛛は普通これぐらいの大きさですよ?」

「そつ、そうなのか……。情報不足だった」

のんきに話しているものの蜘蛛はどんどこつちにわしゃわしゃ近づいてきている

「こつちくん!」

シャドウからナノソードを取り出すと30メートルくらいの間合いから一気に横風ぎの一閃を放つ
ぶん!

風切り音ともに真つ二つになる蜘蛛

「これでクエスト終了か?意外と軽かったなあ」

みな何故か黙ったまま俺の後ろを見ている

「とつ、時哉!後ろ!後ろを見て」

声を震わせながら叫ぶ姫

「ん?一体何を……」

振り返った俺は絶句した

目の前に広がる蜘蛛の顔その大きさはよくわからないがさっきの蜘蛛の数倍の大きさだ

時哉はとっさに叫ぶ

「お前ら下がれ！」

そう言った瞬間蜘蛛の足によって吹きとばされる時哉

「時哉！」

「主！」

「お兄ちゃん！」

三人ともとっさに叫び2人は姫を抱えて一旦さきほどの穴とは違う穴に入る

「いってえ・・・ケアルガ。ヘイスト。ブレイブ。イフリートやつを焼き切る。剣に焰纏わせろ」

（わかったよっ）

この世界にきて初めてという痛みに少しだけ殺意が芽生えた時哉を止められるものはもういない

蜘蛛はその大きな瞳をギョロつかせ時哉の生存を確認し、こちらに前足を突き出そうとする

「鈍いな・・・お前」

蜘蛛にわかるようちゃんと通訳魔法は使っている

蜘蛛はかまわずそのまま壁ごと時哉の身体を貫く……はずだった

「だから鈍いだよお前」

蜘蛛の目の前に移動していた時哉は諭すように蜘蛛に語りかける

「剣と成して焰と成す。祖は浄化の炎」

右手に携えた剣は紅く燃えたぎっている焰を蒼に染め上げていく

薄い刀身は蒼炎帯びその長さは6メートルにまで長くなった

「いくぞ」

冷やかな声とともに時哉は舞う

洞窟という狭い空間を最大限に生かし脚を一本ずつ切り落としていく

蒼炎は脚を切断した面から本体にまで広がり蜘蛛はみずからの巨体を揺らしながら苦痛のうめき声をあげる

「あばよ」

周り一面の蜘蛛の糸を蒼炎で焼き払う

「すいいのじゃ……」

レティシア姫は蒼炎に見とれながら呟いた

「今度こそ終わりましたね主」

「お疲れ様！お兄ちゃん」

ティアが抱きついてきて零は静かに近づいてきた

「さて、そろそろ洞窟にも飽きたし地上に戻ろうか」

俺は明るい声で三人に呼び掛ける

「むゝ」

姫様はどうやらまだ口喧嘩の事を根にもっているみたいだ

俺達はレビテーションを使ってもときた場所を目指して昇っていく

「気がすんだかい姫様」

姫はまだうなっていた

「不本意ながらお主の實力は確かじゃ。浄化の炎という炎も美しく死体すら残さず消してしまうくらい強力であつた」

珍しくベタ誉めの姫にびっくり

「それはよかった。それじゃもう満足したよね？」

にやりと笑う姫

「いや、まだじゃ。とりあえず国に帰ったら褒美を遣わそう」

えー、ギルドの報酬だけで十分なんだけど・・・

「まあ、少しくらいよってでもいいけどさ。正式に入城の手続きとかなしないで大丈夫なのか？」

意味ありげな笑顔のまま姫

（くくく、こやつを妾の下僕にすれば妾は王の権利を勝ち取れるのじゃ）

めちゃくちゃ顔にでてるよ・・・

何を考えてるか大体わかってるとはいえ無下には断れないので俺達はギルドに寄った後城に向かうことにした

ギルド本部

「ただいま帰宅しました！」

つつい嬉しくて言ってしまった

「ところで土蜘蛛って本当にCランクなんですか？とても大きかつ

たですよ」

ふと疑問に感じたので聞いてみた

「たしかにあれば大きいですけどさすがに2、3人くらいですよ？」

ふむ、それじゃあそれは突然変異みたいなもんか・・・

「他にもいたら大変なので気をつけるように他の冒険者に言うておいてください」

「わかりました。それでは報酬のほうをどうぞ」

俺はカードで報酬を受け取りそのまま出口に向かう

その時、俺を見ている視線があることに俺はまったく気づいていなかった

第五話土蜘蛛退治（後書き）

みんなが大好き言い訳タイムはじまるよ〜♪

ってなわけでごめんなさい（泣）

言い訳とかもうあきらめました！

ちよっ！やめて空き缶とか投げないで！

意味不明なフラグ立てまくりな物語ですが、みなさん見捨てないでください！

それでは次の話でノシ

第六話お城で説教？（前書き）

復活します！

お待たせした方々すみません

第六話お城で説教？

「もうやめませんか？」

俺の前には1人の戦士が立っている

いかにも英雄っぽい金髪に葵瞳を持ちかなりの重量になるであろう鎧を着ている

「我が名誉にかけてお前に勝ってみせる！」

ものすごい剣幕の男に対して時哉はかなり気楽に接している

「いや、お前がやられたら色々困る人達がいるだろ？剣を納めろよ」

「それは貴様が俺を倒すということかかたはら痛い！」

このめんどくさい男の登場を説明には少し時間をさかのぼる必要がある

城：謁見の間

簡単に説明すると馬車でつれてこられた

ん？簡単すぎるって？

理由か？理由は俺が姫様を連れ出したと勘違いされてたことかな

あはは、なんで涙が出るんだろう

俺なにも悪いことしてないよ

「時哉どのと言ったかそちは我が娘を危険な土蜘蛛の巣に連れて行ったというのは誠か？」

「連れていったんじゃないかってついてきたんです」

我ながら軽いいい訳だ

「いずれにせよ何故止めなかった？」

止めたけどね聞かなかったんだよ

とりあえず、責められている俺よりも涙目の姫のほう気にしたほうがいいんじゃないか？

「えーっと、すみません」

秘技！なんとなくあやまる

効果・ときどき災難を避けられる

「謝って済む問題か！万が一のことがあったらどうするつもりだったのだ！」

ちよつとキレぎみな王様

「まあ、いいじゃないですか無事だったんだし」

実際に姫には傷ひとつついていない

「どうやら時哉どのはまったく反省していないようじゃな」

反省って何を？

「よかろうそこまで自身の腕に覚えがあるのならそのものを倒してみよ！」

王様は一番近くにいた騎士を指差した

「ちよつと！お父様いくらなんでもレグスは一般人には倒せませんよ！」

姫がすかさず口を挟む

「なあに、土蜘蛛を1人で倒した実力者だ死ぬことはないだろう。もっともかなりの傷は負うかもしれんがな」

かなりうざい顔で語る王様どんだけ過保護なんだよ！って思わず突っ込みたくなつた

無言の騎士は背負っていた大剣を前に構えていつでも戦える状態に

している

「別に戦ってもいいんだけど俺に利益はあるのか？」
なかったらやる意味ないからな

「利益？そうだなもしも勝ったならお前を騎士団長にしてやろう」
なんか微妙な報酬だ

「ちょっと、時哉あいつの実力は王国騎士団のなかでもずば抜けてるのよ！素直に許してもらったほうがいいよ」

「あいつがどんな実力者だろうと俺には関係ないだろう？本気は出すつもりないから」

聞いている人はこいつは何を言ってるのかというような顔で見ているがただ一人レグスという騎士だけは怒りの眼で見つめていた

「王様処刑許可を・・・」

「おいおい処刑っておま『うむやれ』ええ！？」

王様の掛け声と共に騎士は俺目掛けて斬りかかってきた

「うわっと！」

俺はバックステップで回避して間をおく

レグスはなおも俺に斬りかかってくる

大剣なので見切って避けるのは容易い

俺は避けながら身体強化の術を自分にかけていく

「あきた・・・」

俺は一言呟くとレグスの腹に正拳を喰らわせた

自分の突進力と俺の突きによって力は二倍になりかなりのダメージは与えられた

って感じで今に至っている

「とりあえず、寝ろ！」

俺はやつの首筋に手刀をおろす

もちろんほとんど力は込めていないけどそれでも気絶くらいはさせることができる

「かはっ！」

レグスはうめき声をあげ床に倒れる

会場からは拍手喝采が！

起こるはずもなくただみんなの驚いた顔だけがあった

「レグスが負けたじゃと……。ありえん！だが……」

なんか王様はもごもごしゃべっている

「お父様！約束通り時哉を騎士団に入れてください」

さっきまで勝てるわけないと言って心配していた姫だったが勝った
そばからいきなり騎士団入隊を希望してきた

「いや、俺は入らないから」

「なぜじゃ！？」

いや、どうして王様が反応するんだよ！

「もともと俺はこの世界を回って歩く予定だったからすぐに騎士団
などに入る気はさらさらない」

「そなたのようなものが旅をしていたら多くのものに狙われるぞ？」

大きな力を持つものは国にとって貴重な戦力になる

「わかってるさ。でもこの場ですぐに決断したらもう世界を回ることとは難しくなるだろう?。」

王様はかなり悩んでいたようだがやがて口を開いた

「しかたないのう……。ならば期限をつけよう半年後にまた返事を頼む」

意外に融通の聞く王様で助かった

かならず自分がいい方に味方したいと贅沢は言わないがもつとこの国、世界のことについて自分は知らないといけない気がした

「助かるよ。では、これで失礼させていただきます」

時哉はレティシア姫を残し零とティアをつれて謁見の間を去った

「疲れたー！」

いや、もうそれしか思いつかない

「あんな弱い人をお兄ちゃんと戦わせるなんて意味ないのにね？」

「まったくです。主の力は1%も出してませんでしたし」

上からティアと零だ

「いやいや、1%は言い過ぎだつてば」

実際あの騎士かなり強いらしいし

「じゃあ、何%くらいですか？」

「2%くらいかな（笑）」

「たいして変わらないじゃないですか！」

あはは

俺たちはたあいな会話しながら宿屋に向かって進んだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3151k/>

最強の召喚士

2010年10月10日05時24分発行